

発達臨床相談 II

佐々加代子

はじめに

I 報では育児に関する情報が氾濫するなかで、どの内容が自分の子育ての手助けになるのかということの選択さえ難しい状況におかれている育児ま直中にある母親たちの不安や迷いの相談先としての電話相談からみる母親の変化を紹介しながら、その不安の要因についての検討をした。また、育児支援・相談先として求められる保育園や相談機関で専門職として働く保育者や臨床者たちは、発達の評価をするときに標準値や検査項目からでた資料だけではなく、発達臨床の視点で丁寧にみることが見誤りのない評価につながる、ということ事例から検討して論じた。

II 報では保育園で実践している保育者たちからの相談内容を発達臨床相談として対応した内容についての検討をする。すなわち、相談依頼者である保育者たちとのやりとり過程をふまえながら、彼女たちが自分のクラスの子どもたちの問題の見方として発達臨床の観点を得た上で実践を重ねてきたその取り組みの紹介とその考察である。

着実な人間関係を形成するかかわりかたをめざして

「就職するまでのあいだに乳児を抱いたり、お世話をしたことがない」「子ども、とりわけ赤ちゃんが大好きだから乳児保育の現場を選んだ」、という保育者がいる。先輩にも学びながらかかわりかたを模索しながら対応しているものの、今一つ実感としてこれでいいのだろうか、という不安感があるという。「子どもが育っていく」ということの実感をより確かなものとして感じるにはどのようなことがあるのだろうか。子どもの発達の初期に出会っているというこの時期だからこそのかかわりの内容というものがあるのだろうか。それはどのようなものだろうか。

このような質問・相談を持ちかけてくるのは、たいていは若い保育者たちである。発達過程における人間関係の形成過程を理論としては学んできた（筆者の授業では言葉 I）が感覚的にわからないというのである。「赤ちゃんを抱いたときでも自分の触覚で感じられるものが今ひとつはっきりとしない」ので迷いがあるという。この相談内容は現職の保育者のみならず、母親たちからも受けることも多い。

触覚的信号行動系のコミュニケーション関係の交信という視点で整理すると、「乳児からの信号行動系を受けとめる保育者がその信号行動系の読みとりかたがわからない」のか、「乳児のがわの信号行動系が微弱であるがゆえにわかりにくい」、ということなのか、その両方が関係しているのか、ということであろう。保育者が乳児からの信号行動系を読みとれない場合には、両者の関係はなかなか進展してはいかない。むしろ、触覚的信号行動系

の交信ゆえに、保育者の不安感がそのまま、相手である乳児に伝わってしまう、ということになる。その交信過程では、その場の両者の人間関係はマイナスの方向へひっぱられていくことになる。

1. 乳児保育における発達臨床のかかわりかた

1) ひとりの子どもとのかかわりかた

養育行動項目に区分をして表した(表1)⁸⁾。いずれも保育者と子どもの目の距離を20cmに保持するようにする。子どもの人間関係の育ちぶり(表2)^{3), 6)}がどの段階にあるのか、ということの判断がつきにくい場合でも、月齢が大きい場合でもここから始める。対面型でのかかわりになるが、ゆっくりと丁寧にかかわっていく。衣服の着脱についてもオムツ交換と同様にかかわる。そのかかわりを通して、自分の触覚的な感覚も養うことにする。子どもからの触覚的信号行動系の交信内容をきちんと受けとめていくということの学習にもなる。保育者が感覚的にわかるようになることは、同時に子どもの触覚的信号行動系についての交信も豊かになってきた、とみなすことができる。十分に時間をかけて、「養育行動のかかわりを急いですませる」ということをしなければ、一回ごとのお世話・介助の時間がちょうど十分な時間になる。一時を急がない、ということである。両者の人間関係の形成過程にかかわる接触の機会であり、人間関係の原点になる。この時期だからこそ、その場で充分にかかわりあい、交信過程を大事にする、ということである。個に即した丁寧なかかわりの内容になる。

2) 複数の子どもとのかかわりかた

乳児保育の現場は一クラスが9名が普通である。3名の保育者とともにすすめていくことになる。一人ひとりの子どもについて、表1のような、発達臨床のかかわりかたをすすめていくようにしても、乳児の月齢によってはさまざまなリズムもある。保育者一人に子どもひとりということがむずかしい場合もあるが、一人ひとりを生かしていく、ということの基本にしたかかわりの例として、食事の場面について表3⁸⁾に示してみた。

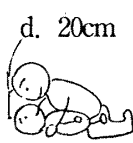
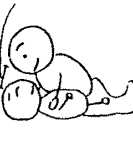

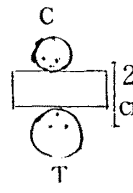
3) コミュニケーション関係の成立に向けてのかかわりかた

入所・入園時期は子どもによって異なるものである。産休明けからの子どもたちが増えてきている現状では、表1のようにかかわっていくと発達の初期であればあるほど、人間関係の形成過程で関係が濃くなる対象の人間を子どもが選択をすることになる。その際かかわりの上手な保育者が選ばれることが多い。保育の現場では人間関係の形成過程は接触体験期を経て共有体験期のあいだにあることが多く、顕著な弁別不安期は比較的少ない。「他者との区別をする、いわゆる人見知り」が子どもが選んだ対象の保育者との間に顕著に見出されるには、保育者との間柄において弁別不安期に記している行動項目が見出されることによる。すなわち、保育者との距離を縮めようとする行動群である。

顕著な「人見知り」は最近目立って減ってきている。人間関係は段階をふんでいくもので、子どもが選択をする人との間に人間関係の形成過程がなければ起こり得ない。「希薄な人間関係」が要因ということになるだろうか。発達臨床の養育行動を保育過程で充分にしていけば、かかわりの質と時間量が関与し、子どもが対象の人間を選択することになるものの、どこで保育を受けている子どもたちにおいても「人見知り」は起こってくる。その時期に安心な人との間で、さまざまな不安感を解消してもらい、大過なく通過で

きるかどうかということが、その後の子どもの人間関係の形成過程に影響する。人間関係の形成段階の安定期においてでも、さまざまな突然の不安を鎮めるための保育者のかかわりとそれに費やされる時間が必要になる。安定期まで充分なかかわりをすることで人間関係の段階を経ていけるようにかかわることが必要とされる。そのかかわりの質が一定であれば、担当が変わったとしても段階をふまえられることになる。

表1 乳児保育におけるひとりの子どもとのかかわりかた

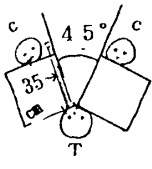
かかわりかたの内容 養育行動	位置関係図	かかわりかた
オムツ交換		<ol style="list-style-type: none"> 1. 座っている時にオムツに指をいれてぬれているのかどうかの確認をする。 2. 「ぬれているね。オムツ替えましょうね。」と言いながら子どもの頭を両手で支え、体をできるだけ密着させながら床に降ろす。 3. 子どもと保育者の顔が20cm以内になるように真正面に位置しながら「オムツ替えようね。」などと言う。 4. ことばかけをしながら、ゆっくりと体をずらしてオムツ交換をする。子どもの視野に入って対面型45cm以内になるようする。
寝かしつけ		<ol style="list-style-type: none"> 1. 子どもを抱っこそのままふとんに降ろす。接触している部分をできるだけ多くする。 2. 子どもの顔と保育者の顔の距離が20cm以内になるようにして「おひるねしようね。おひるねね。」などと言う。 3. ゆっくりと顔をあげて、子どもの顔と保育者の顔の距離が45cm以内を維持しながら、子どもの呼吸に合わせて、ゆっくり体をさわったり、軽くトントンとたたく。 4. 体をトントンと軽くたたきながら、歌を歌ったり、ことばがけしていく。 5. 泣いてしまう子どもに対しては、抱いておさめたあと、1~4をする。
食事授乳		<ol style="list-style-type: none"> 1. 左抱きでしっかりと子どもを支える。 2. 授乳の時（哺乳瓶、母乳）、子どもの顔と保育者の顔が正面になるように、首を左側に傾けて、その間の距離が20cm以内になるようにする。 3. にこやかな表情で子どもの目を見ながら「おいしいね。ごくん、ごくん。」などのことばかけをする。 4. 休みながら飲んでいるときには、ゆっくりとことばをかけながら、飲み続けるのかどうかを、子どもの表情などを見ながら次の対応を考える。もういっばいだとみなしたときには、授乳をおしまいにするようにもっていく。
食事 授乳以外の 食事介助		<ol style="list-style-type: none"> 1. 図のように対面型に位置する。 2. 食事を与えるときに、保育者の顔を子どもに近づけながら距離20~30cm以内になるようにする。 3. 「アーン、お口あけて」とことばをかけながらタイミングよく子どもの口に離乳食を運ぶ、次の一口を急がない。一口ずつゆっくりと子どもが食べるペースをつかみながら介助は丁寧に行う。

d: 距離 T: 保育者 C: 子ども

表2 母子関係の形成過程における乳児の行動項目にみる信号行動系の種類と特徴

段階	母子関係成立段階	番号	乳児の行動項目	月齢	交信生起	信号行動系の種類	方向	強度	母(人)との距離m
I	模索期								
II	接触体験期	1	抱くとおさまる	10日	○	T			0
		2	音のした方に首をまわす	2		A・V	向く		
		3	あやすと顔を見て笑う	2	○	V	(正面)		0.5以内
		4	話しかけると声を出すことがふえる	2	○	A		+	0.5以内
		5	泣いているとき母親が声かけるとピタリと泣きやむ	2.5	○	A		黙+	1.5
		6	母親の声にふり向く	3	○	A(母)	向く	+	1.5
		7	そばにいる人を目で追う	3		V	向く		2
		8	指しゃぶりをする	3		V			
		9	母親の顔に対しては異なった反応をする	3	○	V(母)	(正面)	+	1.5
III	共有体験期	10	あやすとキャッキョッと喜ぶ	4	○	V・A	(正面)	+	
		11	あやすと体全体で反応する	4	○	V			
		12	部屋に誰もいなくなると泣き出す	5		A		+	3
		13	母親から離れているとき、眼を母親の方に継続的に向ける	5		V(母)	向く	+	2~3
		14	母親と他の人の区別がつく	6		V(母)			
		15	母親が抱くと顔などをさわる	6	○	V(母)	向かう	+	0
		16	母親が手をさしのべると体をのり出す	6	○	V(母)	向かう	+	0~0.5
		17	母親が部屋を出ていくと泣き叫ぶ	6		V(母)		+	0~0.5
		18	呼ぶとふり向く	6	○	A	向く		
		19	要求があるとききりに声を出す	7	○	A		+	
20	知らない人があやすといやがって泣く	7	○	V・A					
IV	弁別不安期	21	人見知りをする(母親にしがみついていけばよい)	8	○	T・V・A(母)		+	0
		22	母親が出ていくとはっていつて泣きわめく	8	○	V・A(母)	向かう	+	2~0
		23	母親が出ていくとはっていつて追いかける	9		V(母)	向かう	+	2~0
		24	母親のあとをしきりに追ひ、くっつきまわる	10	○	V(母)	向かう	+	0
		25	欲しいものは、一本の指で指す	10		V		+	
V	安定期	26	興味のあるものは指す	10		V			
		27	知らせたいものがあると顔を見て指して「アア」と言う		○	V・A	向く	+	
		28	初語	13		A			

表3 乳児保育における複数の子どもとのかかわりかた (1999)

かかわりかたの内容 養育行動	位置関係図	かかわりかた
食事 授乳以外の 食事介助		<ol style="list-style-type: none"> 1. 二人の子どもたちの介助ができるように図のように位置する。 2. 一人ひとりの子どもにことばかけをしながら、一口ずつ食べさせる。「お口あけて、はい、～ね。モグモグ」など。 3. 一人ずつ丁寧にやりとりをする。介助のときは対面型になるように顔を子どもの方に向ける。

事例：0歳児の場合

発達初期ではない時期での入所・入園の場合には、その子どもが人間関係の形成過程のどの時期にいるのか、ということの判断をしなくてはならない。発達の評価でもある。簡単な方法として表4で示した上で評価を試みた(都内の公立の保育園0歳児7名)^{6), 10), 11)}。

保育者と子どもとの触覚的・信号行動系の交信過程内容からみて3タイプに分類できる。促進型、不定型、回避型である。入所・入園までの人間関係の育ちによって得られた交信過程の情報に違いが出ているが、どの子どもにおいても「月齢は高いものの十分な段階にはきていない、とみなせる状況」である、という判断をした。十分に時間をかけながら、保育の第一期は子どもたちにとって保育者が見えやすいように、保育室の模様替えをして表1のようにかかわった。また、子どもたちが移動能力を持つようになったときにも、保育者がいつでも子どもたちの視野に入るように、1m以内にいるように心掛けて対応した。結果として子どもたちと保育者との人間関係の形成段階としては、表5^{6), 10), 11)}になった。段階を経て育っていったということがわかる。

事例：1歳児の場合

都内の公立の保育園の一歳児9名。4月当初の子どもたちについて、保育者が抱っこをしたときのことから考えた(表6)^{8), 9)}。4月の子どもたちの年齢は、A; 1:11, B; 1:11, C; 1:10, D; 1:9, E; 1:9, F; 1:8, G; 1:7, H; 1:5, I; 1:2である。

人間関係の育ちについての評価としては、不安定な状態である、ということがわかる。0歳児ではないということは移動能力を持っている、ということなので、保育者との接近・接触の時間を保ち、質的により良いかかわりになるような配慮を試みた。保育者3名が同じ方針で実践した。

人間関係の形成過程はその後育まれて、保育者の真似をしながらさまざまなことを吸収していった。

表4 H組の子どもたちとの交信過程と子どものタイプ (梅田, 1989)

子ども	の年齢 前 時刻	運動能力	保育者と子どもとの交信過程	信号行動系	表情図	子どものタイプ
A	11 カ月 半	つたい歩き	他の子どもが泣き出す (A) ◎も泣き出す (VA)。◎は◎に近づき (V) 抱きあがける (T)。◎は泣き続けたまま泣き止む (T.V.A)。抱っこから降りる (T)。◎が泣く (A)。◎は◎を抱っこしたり ◎おんぶをしながら泣ける (T)。	T. 抱っこの維持要求。おさまりは悪い。口角が下がっている。口を細めている。口角が下がっている。口をやや開いている。 V. 抱っこの維持要求。おさまりは悪い。口角が下がっている。口を細めている。口角が下がっている。口をやや開いている。 A. 泣く。		不定型
B	10 カ月 と14日	つたい歩き	◎はおすわりしている (V)。◎は今にも泣き出しそうな表情をしている (V)。◎はまわりや◎の顔を見る (V)。他の子どもが泣き出す。◎は泣く (V.A)。◎は◎に近づき (V) 抱っこする (T)。◎は泣いている (A)。表情は目頭に入力目をつけている (V.A)。表情は目頭を少し開いている (V)。10分ほどするとおさまる (V)。◎は◎の横におろす (V)。泣き出す (V.A)。	T. 抱っこの維持要求。おさまりは悪い。目をやや目頭にやや力を入れていて。口角を下げて細めている。 V. 抱っこの維持要求。おさまりは悪い。目をやや目頭にやや力を入れていて。口角を下げて細めている。 A. 泣く。		不定型
C	9 カ月 と10日	つたい歩き	◎は泣いている◎を抱っことで受け入れる (T)。◎は目をつぶる周囲にしわを寄せ、口角を下げて口をやや開き (V) 泣いている (A)。◎は泣きながらそっくり返る (T.V.A)。◎は◎を抱っことで支えきれなくなる。おんぶする (T)。◎のぐずり方がおさまってきた (T.V.A)。おんぶをしたまま◎が座ろうとする (T)。◎は強く泣き出す (T.V.A)。◎は立ち上がったままおんぶを続ける (T)。まわりの子どもの泣き声がある (A)。泣き出す (T.V.A)、ということを繰り返す。	T. 抱っこの維持要求。おんぶでのおさまりは悪い。口角を下げて細めている。口角を下げて細めている。 V. 抱っこの維持要求。おんぶでのおさまりは悪い。口角を下げて細めている。口角を下げて細めている。 A. 泣く。		回避型
D	6 カ月 と20日	うつ伏せ背後に座布団程度の支えがあればおすわりができる	◎はすわっている (V)。ぐずり声を出す (V.A)。指しやぶりをして目をつぶりかけている (V)。◎は◎が眠いのだと思いたい◎に近づき (V) 抱っこをして (T) ベットに寝かせる。◎はちらっと目を合わせてから、壁の方を向く (V)。◎は足をバタバタつかつかさせ90度回転する (V)。◎は◎の体を軽くトントンとたたき (T)。◎のぐずり方はおさまらない (T)。タオルで枕を作り、タオルが顔にかかるとうにする。◎はおさまる (V)。	T. 抱っこの維持要求。おんぶでのおさまりは悪い。口角を下げて細めている。口角を下げて細めている。 V. 抱っこの維持要求。おんぶでのおさまりは悪い。口角を下げて細めている。口角を下げて細めている。 A. 泣く。		回避型
E	6 カ月 18日	うつ伏せおすわりはできない	◎は◎を抱っことで受け入れる。◎は目をまん丸に見開く (V)。口をポカンと開く (V)。◎は◎の顔をじっと見ると見ると◎の膝の間におろす (V)。5分ほどして◎が泣き出す (V.A)。◎は◎を抱きあげ、向かい合いの抱っこをする (T)。◎は泣き止む (T.V.A)。◎は◎を降ろそうとする (T)。◎は泣き出す (T.V.A)、抱っこする (T)。泣き止む (T.V.A)。	T. 抱っこの維持要求。おんぶでのおさまりは悪い。口角を下げて細めている。口角を下げて細めている。 V. 抱っこの維持要求。おんぶでのおさまりは悪い。口角を下げて細めている。口角を下げて細めている。 A. 泣く。		促進型
F	6 カ月 14日	うつ伏せおすわりはできない	他の子どもが泣き出す (A)。◎は目頭に入力目を入れ口角を閉じ口角を下げる (V)。30秒ほどして◎が泣き出す (V.A)。◎は◎を抱っこして左右に揺る (T)。背中をトントン軽くたたき (T)。言葉をかける (A)。◎は泣いている (A)。◎は◎にミルクを飲ませる (T.V)。◎は強く泣き出す (T.V.A)。◎は抱かれて泣く (T)。◎は◎を抱っこしたまま座る (T.V)。◎は泣き止む (T.V.A)。◎は立ち上がったまま抱っこを続ける (T)。戸外に連れてゆくと◎は泣き止む (T.V.A)。部屋に入ろうとすると◎は再び泣き出す (T.V.A)。	T. 抱っこの維持要求。おんぶでのおさまりは悪い。口角を閉じ口角を下げて細めている。口角を下げて細めている。 V. 抱っこの維持要求。おんぶでのおさまりは悪い。口角を閉じ口角を下げて細めている。口角を下げて細めている。 A. 泣き声。		不定型
G	11 カ月 13日	つたい歩き	◎はおすわりしている (V) 口泣き出す (V.A)。◎は子どもを抱っこする (T)。◎は泣き方が次第におさまりがかりかける (T.V.A)。泣き出す (T.V.A)。◎は◎をおんぶする (T)。泣き止む (T.V.A)。◎は◎に寄りかかって眠る (T.V)。	T. おんぶでおさまる。目頭に力を入れて泣いている。口角を下げて泣き声。 V. 泣き声。 A. 泣き声。		促進型

◎：保育者、◎：子ども、T：触覚的信号行動系、V：視覚的信号行動系、A：聴覚的信号行動系

表5 H組の子どもたちの人間関係の様相の推移 (梅田 1989)

子ども	4月	7月	10月	1月	3月
A	抱っこでのおおさまりが悪い	抱っこでおおさまる 表情しぐさ、 声で(Ⓔ)を誘導	さすとおおさまる	表情で(Ⓔ)を誘導 表情で(Ⓔ)を誘導	
B	抱っこでのおおさまりが悪い	近距離で抱きつく		近距離で接近、(Ⓔ)の体に触れる、叩く	近距離で困ると(Ⓔ)に接近
C	抱っこをすするとそっくり返る オソニアでのおおさまりが悪い	近距離で抱きつく 接近行動	後追い	(Ⓔ)と表情でのやりとりをする	(Ⓔ)の仕事をつくりまねる (Ⓔ)を視線だけで誘導
D	体を軽くたたかれたもおおさまらない	抱っここの維持要求	抱っこでおおさまる 抱っこからおおそろうとする 抱っこがみつく	近距離で接近する	(Ⓔ)から(Ⓒ)への目の後に(Ⓒ)から抱っここの維持要求
E	抱っこでおおさまる	抱くとおおさまる	さすとおおさまる	後方より(Ⓔ)にどどびつく (Ⓔ)の前方からとびつく	(Ⓔ)後から接触 (Ⓔ)に手をささし のべる
F	抱っここの維持要求	さわると抱くとおおさまる	抱くとおおさまる 抱くと(Ⓔ)に寄りかかる	接近してくっついてくる	人見知りのため(Ⓔ)に接近 人がいると(Ⓔ)にしがみついて いる
G	おんぶでおおさまる	5月入所			
H	7月入所	抱くとおおさまる 抱くと(Ⓔ)に寄りかかる	接近し、ささし、そのことについて(Ⓔ)とやりとりをする	接近し、抱きつく 後追いすることもある	接近し、(Ⓔ)に両手をささしのべる
I			1月入所	抱くとおおさまる	抱っここの要求を、表情、しぐさで表す
J				2月入所	近距離で接近し、(Ⓔ)にすりよ りつかまっている

子どものタイプ

回遊型
 不定型
 I 模索期
 II 接触体験期
 III 共有体験期
 IV 非明不安
 V 安定期

 : 保育者
 : 子ども
 : 目的接近

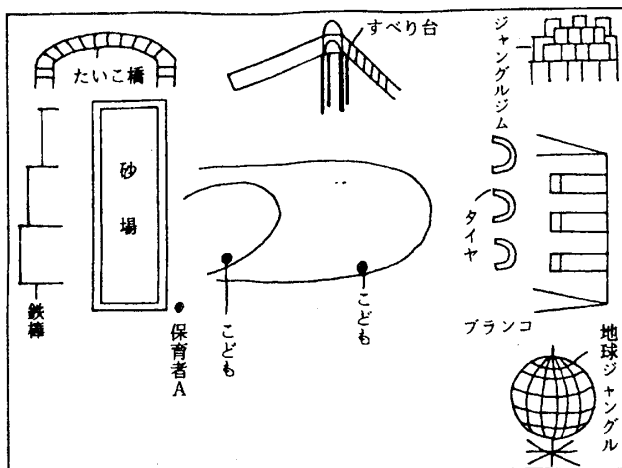
人間関係成立段階

3月のある日の子どもたちの様子である。

場面1；砂場でのお買い物ごっこ

3月6日、砂場でのお買い物ごっこ

砂場にB、G、Jちゃんが遊んでいる。Cちゃんが「ねえねえお買い物ものいってくるね」と言いにくる。保育者A「うん、いってらっしゃい」、Cちゃん「Cはちょっといってきます」「自転車（ローラースルー）でいってくるから」、保育者A「いってらっしゃい、気をつけてね。いってらっしゃい。あっCちゃんどこいくの」、Cちゃん「うーんと、西友」「Cは、ちょっとおもちがないので、いって来ます」、保育者A「はいはい、いってらっしゃい」。Eちゃんが近づいてきて「Eちゃんは」と言う。保育者A「Eちゃんもお買い物。うーんと、牛乳買って」、Eちゃん「牛乳」、保育者A「うん、牛乳お願いね」、Eちゃん「いってきまーす」。Hちゃんが立って保育者Aを見ている。保育者A「Hちゃんもお買い物行ってくれるの、じゃあね、たまごかってきて」、Hちゃん「Hちゃんたまごかってくる」。Eちゃんは5・6歩歩いて戻ってくる。「うりちれだよ」、保育者A「うりきれだったの（どこで覚えたのすごいなあ）じゃあ、ジュース買ってきて」、Eちゃん「ジュース」、保育者A「うん、ジュースお願いね」、Eちゃん「いってきまーす」。Hちゃんは、Eちゃんに合わせて走っていくが、Eちゃんが5・6歩で引き返したので、あわてて引き返し、Eちゃんの後を追って、「ないの」と保育者Aに言う。保育者A「えー卵ないのかあ、じゃあにんじん買ってきて、カレー作るから」、Hちゃんほうなづいて走って行く。Hちゃんが行くときにEちゃんがやってきて、「もう、うりちれだったよおー」と言う。「そっかあ、うりきれかあ、困ったなあ、じゃあオレンジジュース買ってきて」。Hちゃんは遅い足でブランコの方まで行って帰ってくる。Eちゃんは5・6歩走って帰ってくる。EちゃんはHちゃんが行って帰ってくるあいだに、2・3回往復した。スピードをつけているので疲れているようだ。ことばは役に成りきっていると思う。疲れが多少見受けられるもののニコニコ顔。（Hちゃんは体が堅い。ブランコの方まで行って帰ってくるには大変だと思われた。）しかし元気に動いたその表情はやわらかい。15分。



図IV-12 砂場でお買い物ごっこで使った場所

Eちゃんは車を見つけて乗ろうとする。もしかしたらお買物の延長かもしれないと思う。Hちゃんは保育者Aのところへ来て手をひっぱり、「ちょっときてよ」「ねえこっち」「保育者Aとおかいもの」と誘い出す。保育者Aは砂場に何人か（上記の3人以外にも0歳児クラスの子）がいたので動けない。「Hちゃんごめん、保育者Aお料理（砂場にいる子の相手）をしなくちゃいけないから1人で行ってきて」と断る。Hちゃんは不満そうであったが、そのうち保育者Aと子どもたちと一緒に砂場で遊ぶ。

保育者B「牛乳とにんじんかってきて」、

Cちゃん「いってきまーす」保育者A「いらっしゃーい、いらっしゃーい、何にしますか」C、G、Eちゃん「牛乳とにんじんください」、A・Bちゃん「〇〇ください」。ほかのものにかわっている。

保育者A「はいはい〇〇ですね、はいどうぞ」、Jちゃん「〇〇ください」。一緒にいる子と同じもの。
保育者A「はいはい〇〇ですね」、Cちゃん「はいどうも」。後半になると他の場所も使うようになる。
仕事に行くなどの用をつくりながらである。

場面2；たくさんのごっこ遊び

出席6名、A、G、H、I、J、Lちゃん、外が寒いので室内ですごく。人数が少ないので保育者Aは、進級準備の作業をしており、保育者Bが子どもを見ている。保育者Bがお母さん役で、子どもたちは保育者Bと声やことばを交わしながら動いている。Hは保育者Aの側において作業をじっと見ている。

(きっかけ、細かい流れは忘れてしまった。)

保育者B「ごはんですよ」の声かけでごはんを食べるまねをする。

保育者B「歯みがきしましょ」ごしごしと歯をみがくまね。

保育者B「さあ、ねるじかんですよ、さあさあ、みて下さい」

子どもたちは横になり、そのうえにシーツを保育者Bがかける。保育者Bも寝ころがり「でんきを消して、さあ、ねましょ」と言う。(少しの間) Gちゃん「あっ、だれかきたよ」、保育者B「えっ、だれかきた。ちょっと見てくるからまっててね。誰もいないわ。どろぼうさんかしら。でも大丈夫。かぎをしめたから。さあ、ねましょ」

保育者AはしきりにHちゃんに「いっしょにあそんできなよ」と言ったり、子どもたちの動きに合わせて「みんなごはんたべてるよ。Hちゃんも行ってきなよ」などと声をかけていた。保育者Bが、誰が来ているのか見に行くと同時にHちゃんが、保育者Bの方へ行く。保育者B「あら、Hちゃんおかえり。おそくまでお仕事していたの。さあさあ、早くねましょ。もうお風呂はパスパス」

(少しの間) 保育者B「コケッココー、あさですよ」、子どもたちも一緒に「コケッココー、あさですよ」と言って起きだす。

保育者B「さあ、ごはんですよ」。Hちゃんは起きだすと、すぐに保育者Aの所へ、他の5人は、保育者Bと一緒にごはんをたべるまねをしている。

保育者B「さあ、お仕事頑張って。あ、そうだお買い物行ってきて。にんじんと牛乳とじゃがいもおねがいね」、G、J、Aちゃんは、保育者Aのところにくる。Hちゃんは「Hちゃんのごはんは」と言いながら保育者Bの所へ。

Gちゃん「あの、にんじんと、牛乳とじゃがいもください」と保育者Aに言う。保育者A「はい、にんじんと、牛乳とじゃがいもですね」と言いながらGちゃんの右手に3回重ね合わせ、「はい、500円になります」と右手を出すと、Gちゃんは手を1回合わせていく。Jちゃん「Jは、にんじんと、えっと、あと、あかと、あおと、あかと、えっとえっと…」、保育者A「にんじんと牛乳ですか」、Jちゃん「はい」、保育者A「はい、わかりました、どうぞ」、Jちゃんの手を2回手を重ねて差し出すとJちゃんも1回手をのせていく。

Aちゃん「Aちゃんね、えっとえっと…」、保育者A「じゃがいもですか」、Aちゃん「じゃがいも(もっと不明瞭)」、保育者A「100円です」、Aちゃんの手を1回重ね合わせると、すぐに行ってしまう。

Iちゃんが来て「くださいな」、保育者A「にんじんですか」、Iちゃん「はい」。

Lちゃんは、IちゃんのうしろにおいてIちゃんがいくと「じゃ〜」保育者A「じゃがいもですか」、Lちゃん「はい」。保育者Aが1人ひとりやりとりをしているあいだに、Gちゃんが「どろぼうさんがきたー」と走りまわっている。Aちゃんは「えー、こわーい」と言っている。保育者B「えっ、ど

ろぼうさんがきたの。大変、おまわりさん呼ばないと」、Gちゃん「おまーりさんきてー」と走っている。保育者B「もう大丈夫、おまわりさんきてくれたから、Gちゃん、かぎしめといて、どろぼうさんがこないように」、Gちゃん「うんわかった（少し間）あっ、かぎなーい」、保育者B「えっ、ないの、こまったわねえ」、A、G、J、I、Lちゃんがさがしている。「ないよー」と誰か言う。保育者B「あっ、Gちゃんあったよー。もう大丈夫だね」

A、Jちゃんがダンボールの車で走りまわっている。保育者B「さあ、みんな、バスにのってピクニックにいかない」と言いながら椅子を並べる。子どもも一緒に並べ始める。バスごっこが始まる。歌に合わせて体を左右に揺らしてリズムをとっている。保育者Bが紙を切ってきっぷを作って渡したり、子どもは「お仕事に行ってくる」「おかいもの」と言って、部屋をひとまわりして、バスに戻ってきたりしてあそんでいた。

事例：2歳児の場合

2歳児は移動歩行能力ももっている。このことは「保育者との間柄を密にしていく」、ということから考えると難しい要因であると言える。子どもは自分の関心のあるものには自らの意志でそのものに向かうし、行動もする。それまでの間に人間関係の基盤が形成されていけば問題にはならないが、その基盤が脆弱である場合には保育においては重要な課題になってくる。保育者との関係がどのようなものなのか、ということ客観的に判断することが可能なかどうか。可能だとするならどのようなものさしでみていくのか、評価するのか。保育者側の思い込みだけでの判断にしていけない、ということ考えた。

2. 幼児保育における発達臨床のかかわりかた

事例：3-4歳児の場合

都内の公立の保育園の3歳児後半から4歳児後半までの事例。保育者は継続の担当。男児12名、女児13名、計25名。日常の保育活動の自由遊び、登園時における子どもの信号行動系をチェックして分類し、物理的距離関係については目測（距離については計測できるように訓練を積み重ねている）で接近過程の類型（図1）³⁾で整理したものである。一年間の推移を示した（図2）⁴⁾。遠方であった子どもたちも2m以内にいるようになった。保育者がその子どもの接近過程の類型を評価（密接型2名、漸接型7名、振幅型16名）し、個に即してかかわりをおこなった結果であろう。25名との保育ということは大変な努力であった、ということがうかがい知れる。

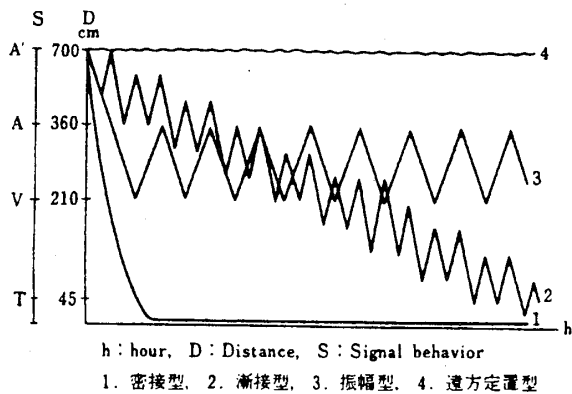


図1 接近過程の類型 (佐々, 1985)

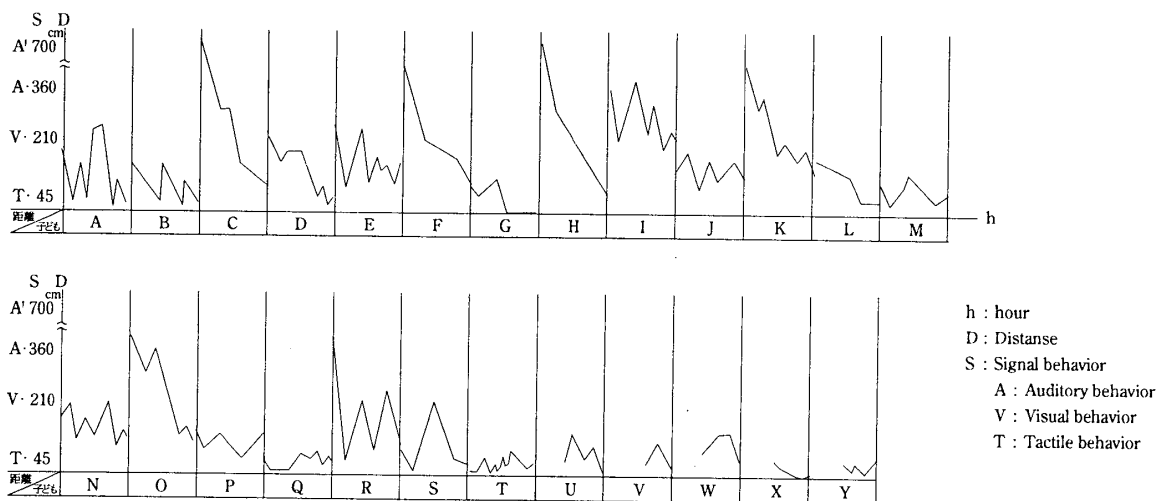


図2 Z組の子どもたちの接近過程の類型

各タイプの典型についての観察事項を述べる。

密接型としてGちゃんに代表されるX；言葉や表情、身体表現で自分の要求をためらわずに出してくる。設定保育中も保母を近くにと呼ぼうと腕を伸ばし顔を保母の方向に向けて「ウン、こっち！」と言う。他児が保母の膝に座っているとその子を押し退けて保母の膝の上に座ろうとする。午睡から目覚めて、保母の姿が見えないと捜して歩き、保母を見つけて目が合うと、目をより大きく開き、歯が見える程度に、口を横にゆるく開いて笑う。その後すぐに保母のところまで走って来て、顔を保母の腹あたりにつっこんで顔を上げ、両手を保母の体にまわしてくる。これが抱っこして欲しい合図だと思われるので、抱き上げると、より快的な表情になり「ウフー・・・」とか「エへへ・・・」と笑い声をたてる。保母が他児と鬼ごっこをしていると、保母から20-30cmまたは保母から1mくら

いのところで保母の真っ正面にいたり、または、ずっとついて歩く。他の子がおやつを食べ始める時になっても、保母がまだ保育室の外で他の用をしていると、まどわりついたり、まわりをいて部屋に帰ろうとしない。

漸接型としてO, C, D, F, H, K, L; Aゾーン時期には、2m以上離れたところから保母の方をチラッチラッと見る。保母と目が合うとさっと目を伏せる。保母に聞きに来たりはしない。ケンカをして泣くことはたまにあるが、声を出さずに涙だけ出しながら部屋のすみにいる。保母が「Oちゃん」と話しかけると、体を一瞬こわばらせて保母の方向を振り向く。目は一瞬大きく見開きまばたきをして見つめる。肩には力が入っている様子。唇はへ字型になっている。Vゾーン時期には、保母への言葉数は少ない。1-2m離れたところから小声で「先生、～していい。」「～ちゃんが～するんですよー。」と言う。保母の表情を伺いながら話す。瞳がよく動きまばたきが多い。顔を保母の方に向けて瞳だけを下から上に向けている。Tゾーン時期には、発話量が増える。午睡や食事のときに、はっきりとした口調で「先生、こっち来て。」と言う。目だけではなく顔の向きも保母の方に向けている。目尻が下がり、口は歯が見える程度に横に開いてほおも軽く上がっている。肩や体には力が入っていない。鬼ごっこをする時にさっと保母の横に来て手をつなごうとすることもある。笑顔が増える。保母の表情を気にせずに行動をするようになった。その後、登園後には10分程度保母の真横にくっついていたり、時々保母の膝に座ることがある。午睡時には保母の手をグューと握って寝るようになってきた。

振幅型、VT振幅型としてS, A, B, M, Q, T, Y; 1-2mくらいのところから話しかけてくる。体に力が入り、両足を10cmくらい開き、左右の足を交互に床からわずかに離すので身体が少し揺れる。「あのね。Sちゃんねー。」などとひと言ひと言区切りながら話す。口調ははっきりしている。目ははっきり見開き、口は横に開くが口元に少し力が入っている。話しているうちにだんだん保母に近寄ってくるが、30cmくらいでその接近が止まる。いつのまにか保母の斜め後ろから近寄り、保母の服をつまんでいることがある。保母が他児を抱っこしていると、2mくらいのところからその様子をじっと見ている。保母が気づいてSちゃんに視線を向けると視線をはずす。

振幅型、V振幅型、N, E, J, P, R, U, V, W; 2-3m離れたところから「T先生、～していい?」「もうお片つけ?」と話すがそれ以上は近づかない。首を傾け、保母に顔だけ向けてその場を離れていく。遊んでいる時は保母に背中を見せていることが多い。

振幅型、AV振幅型としてI。保母の視野に入りにくい場所で遊ぶことが多く、自分から話しかけてくることはごくまれである。保母が話しかけると知らん顔をしたりする。保母が全員に向けて話しをしている時は、ひとりで他児に話しかけていたりする。保母の方から近づくと視線をはずすように瞳をあちこちに動かしている。

事例：4-5歳児の場合

都内の公立の保育園の4歳児後半から5歳児後半まで、保育者は2歳児から5歳児まで継続的に担当。担当の保育者との2年を経たところでの接近過程の類型を評価したものである。2歳児のときは新任であった。「関係が育っている」ということはどのようなものか、という疑問からである。感覚的に自分との間柄ができていていると思っても、それで言いきることではないのかどうかについての疑問を感じたということである。男児7名、女児10名、計17名のR組。(図3)²⁾。密接型3名、漸接型5名、振幅型9名であった。距離-信号行動系という、客観的な尺度を得たことで、子どもとの関係についての見方がよくわかり、かかわりる場合に充分に関係の濃淡を頭にいれながらかかわることを

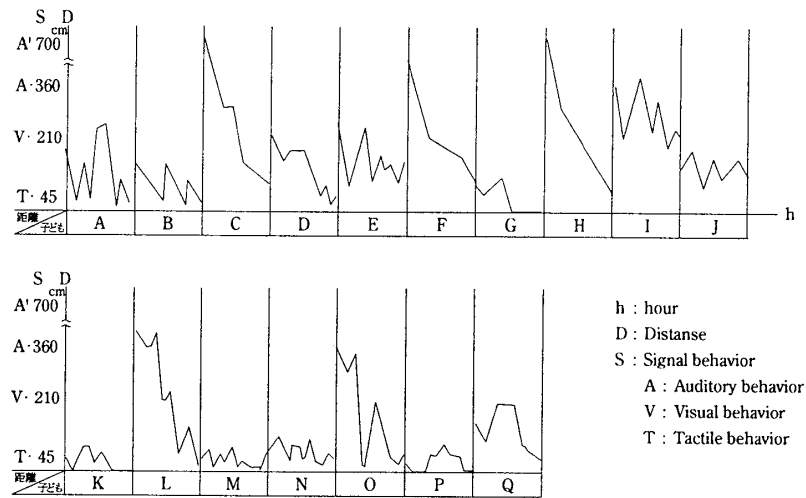


図3 R組の子どもたちの接近過程の類型

したということである。典型事例についての観察内容を記述する。

密接型としてJちゃんに代表されるF, H; 保母との接触要求の表現をことばではっきりと言う。「T先生に抱っこしたもらうんだ。」課業の時も接近しているがとりわけ自由時には保母と向かい合わせの姿勢で両腕をからませてしがみついている。抱っこが多い、20分程度いる。保母が他の子どもとかかわっているときも何とか接触しようとする。保母の身体のどこかに触れている。表情表現も豊かで保母にはわかりやすい。

漸接型としてL, C, E, G, Q; 4か月間はAゾーンで振幅。その後Vゾーンで6か月振幅を繰り返して、Tゾーンに入る。

Aゾーン(2~4m前後)時期: 表情の変化は少なく平坦な顔つき。両唇は真一文字にキュッと結んでいる。保育活動中は体を動かすことが少ない。うつむきかげんで視線は伏せている。(不快の表情か) 保母に声をかけることはなく、泣くことも少ない。他の子どもたちが笑っているとピッチの高い叫声をあげ続ける。にぎりこぶしをつくり、両腕を肩周辺にあげて上下左右に揺り動かすことや体全体を上下に跳躍させる(快か不快か理解しにくい)。話しかたはピッチが高く抑揚は乏しい。発話量は少ない。保母が話しかけると首をかすかに前に傾けるという動きはあるが、いわゆる拒否(いやという)反応は見られない。Vゾーン(45cm~2m)時期: 保母が「ちょっときて」と言うと上半身をねじり動かす。顔の右半分のはほの筋肉をひきつらせて右目をつぶる。口元は右の口角があがる、というように表現が変化する。子どもに視線を向けると、チラチラ見することを7回繰り返す。「ヤダー」と言うようになる。保母の横方向から「あのねー、Bちゃんがねー」と話しかけることがある。保母が他の子どもたちと居ると、保母の後方から肩をたたいたり、おぶさるようなしぐさをする。声のピッチは高いが発話量が増えるにしたがって抑揚がでてきた。Tゾーン(45cm以内)時期: 保母の横方向から力まかせに抱きついてくる。自分の遊び場所まで保母の手をつかんで離さずに連れていく。「ここに居なくちゃだめ。」と言う。ほほの筋肉をひきつらせることがなくなり、表情が全体としてやわらかくなったという印象をもつ。横目で見ることが多い。視線が合うと伏せる。発話量が増える。保母へのことばは命令形。「きのう~に行った」とか妹の病気の話などを述べる。課業の取り組みについては「できた」「できない」と言ってくる。「いやだ」という時に低い声が出るようになる。表情やことばのやりとりで子どものことがわかるようになる。

振幅型、VT振幅型としてB, D, K, M, O, P:一年間VTゾーンで振幅。接近過程と表情には2パターンがある。一つは保母の近く(50cm程度)にいる。うつ向きかげんのままそばまで来て保母の肩をたたき「ねえ、先生」と言う。ななめ前にいる。友だちとのトラブルの話し「～くんね、ぼく何もしないのにぶってくるの」とボソボソと言う。会話は「いやだ」「やりたくない」と言う程度。自分の気持ちの表現は口ごもり低い声で言う。表情は固く、顔はいつも下向き、目は大きく見開いており、両唇はギュッと固く締めている。もう一つは保母のそばにはいない。追いかけられた時だけ「先生、助けて」と言って飛びついてくることや背に隠れたりすることがあるが、すぐに離れる。呼びかけると目を大きく見開き「なに」と言う。視線をまっすぐに向けて笑ったような表情が多い。早口にややピッチを高くして大きい声でしゃべりまくる。間をとらない。TVマンガの内容や友だちとの会話を言う。聞き手にとっては返答のタイミングがつかみにくい。この二つのパターンは一日のうちに変動する。保母が他の子どもと居る時には、保母の背中をぶったり、けったりする。3分程度でやめる。一週間のうちに数回続くこともあるが、まったくないこともある。

振幅型、V振幅型、A, I, N:Vゾーンで振幅。保母の視界におり(2m前後)チラチラと視線を向ける。移動しない。緊急の要求のある時には1m以内に接近するが要求を言う間に体の向きを変えてその場を去る。視線が合うと伏せる。他の子どもたちが掃除中。1m以内に接近し、うつ向きかげんで口ごもりながら小さい声で「ぼくもやろうかな」と言う。依頼すると「いいよ」と言う。両唇の口角を上げて笑い保母を見る。その時は2m程度離れている。10か月めには保母を呼ぶ。振り向かないと頭を上下に振りながら両手のこぶしを胸の高さまでもちあげて2～3回力強く振り下げてじだんだをふみながら「もうT先生、耳ないの」と強い口調で言う。用事の内容については保母の許可を求めることが多い。位置関係は対面形。密接距離で視線を合わせると伏せない。

保育集団の評価について

一人ひとりの子どもたちについてきちんと発達面の評価をすることはたいへんむずかしい。「子どもたちの集まった集団をどのようにみていったらいいのか」、「個も大事にしながら集団も大切にできる保育の運営はどのようにするのだろうか」、という課題を取り上げてみる。

都内の私立の保育園4歳児Y組25名。新入園児は11名。保育者は1名。

保育におけるコミュニケーション関係の成立ということで個と集団の成り立ちについてみていった。子どもの示す信号行動系からの検討とした。表7は出会いの月に得られた子どもたちの特徴をまとめたものである¹⁾。

保育集団運営上、及び保育者とのコミュニケーション関係からみて問題を重くみた子どもたちについては○印をつけた。印が付けられている子どもたちについては、とりわけかわりを濃くしていくようにする、ということの意味する。問題傾向は日常生活習慣において手のかかる子どもたち(GHJKLMNOQUX)、対応の細やかさを要求される子どもたち(CDEIPRTVWY)の2種類に分けられた。新入園児においては、保母がまだ子どもを知らない状態である。子どもたちにとっては園生活が初めてで不安をたくさん抱えているということが予想されるので全員を○印と評価する。以上のように評価してみると、25人中21人が○印となった。4人は子どもの信号行動系がはっきりととらえられるので保母とのコミュニケーション関係は円滑にすすむことが考えられることから、園生活をすすめていく上では困ることが少ない、と理解していく。困った状況になったときには、子どもからの信号行動系の読みとりによって、解消するかかわりの工夫が保母にできる、と考えるからである。その意味で×と評価する。

日常生活で手のかかる群の子どもたちは、保育活動において保育者からの目的接近(表8)³⁾の読み取り型のうちの、要求察知、行動補完、行動継続、行動修正を行うことになる。細やかなかわりをすすめていく子どもたちについては、とりわけ子どもの表情等の視覚的信号行動系の読み取りをしていくために、子どもとの距離を縮めたかわりかたをしていくことになる。両群ともに保育者と子どもたちとの物理的距離は近くに置くということになる。厳しいことであるが、保育者は日常の保育活動を担いながら、個々の子どもたちの行動を細かくとらえながらかわっていくということになる。

保育集団の評価を一か月ごとにまとめた。5月にはB, I, Tが○印に、6月にはB, Tが7月にはBのみとなった。この結果からみると、保育者が個々をよくとらえてかわっていったということ、それが同時に子どもたちの「問題」が小さくなった、ということであろう。保育の当初に個々の問題の評価をしたことが、早期に問題の解消につながっていったように考えられる。

表7 出会いの月に得られた子どもの特徴 (1988)

子ども	性	特徴	評価	4月の情報
A	男	笑顔が素顔	×	笑顔が素顔であるかのような表情が多い。困る状況に落ちると、表情が一転するので、すぐわかる。保育士が気がつくまで困ったかを見せている。
B	〃	たよりになる	×	体格よく、声が大きく明瞭にしゃべる。指示が伝わりやすく、反応がよい。申しおくりと同様である。
C	〃	危険あり注意	◎	意志が言葉として保育士や友だちに伝わりにくい。友だちに相対する時、おこったような、相手をにらみつけたような表情をする。たたくことがある。集合してから部屋から出てゆくことがある。
D	〃	ソフトでおだやか	○	保育士の話をきき、それにもとづいて行動する。近づいてきて保育士が話しかける。しゃべり方がゆっくりとしてソフトな印象を受ける。
E	〃	ねむらない	○	午睡時間中、眠らない。4月後半、ぜんそくの発作をおこし、ぜんそくであることを知る。大声で泣きさけぶ。Jをたたく、つねるの行動をする。
F	〃	明るく元気	×	甘え上手である。表情行動ともに非常にはっきりしており、わかりやすい。よく遊び、よく食べ、よく眠る。
G	〃	どんぐり目	○	双子であり、表情行動が似かよっているため、たびたび両者を混同しがち。
H	〃	細い目	○	困った状況がおこると表情にあらわれる。二人で助け合い行動している。
I	〃	暗く困った顔	○	保育士の前では声を出してしゃべらない。こちらの問いかけに対して、首をたて、横にふり返事をする。わからないあるいは困ったような表情をする。
J	〃	大泣き早口でしゃべる	○	一日中といってよいくらい大声で泣き叫んでいる。手先の動きが未熟で、日常生活習慣を習得する活動において、自分からやってみようとする動きがなく受け身に見える。
K	〃	生活習慣未習得	○	保育園生活2年目に入ったが、日常生活習慣においてできないことが多い。
L	〃	生活習慣未習得	○	保育園生活2年目に入ったが、日常生活習慣においてできないことが多い。
M	〃	一生懸命ききにくる	○	「わからないことはなんでもすぐにせんせいにききなさい」と母親に言われているとおり、泣きながらも、わからないこと、困ったことを、伝えに来る。
N	〃	入室拒否	○	入園して4～5日間、保育室の外から、中をうかがっていた。困った状況になると泣きだす。
O	〃	わが家のふるまい	○	生活習慣において、「だっておかあさんは△△するよ」と、わが家のやり方を主張する。困ったこと、わからないことは、泣いて知らせる。
P	女	おねしょに注意	○	おもらし、おねしょが多いと、母親から昨年申しおくりにより伝わっているが、新年度になってから一度もしない。生活面では、自分で考え動いている
Q	〃	読みとりにくい表情	○	保育園生活3年目に入ったが、日常生活習慣において、できないことが多い。ことばでの指示が伝わらない。表情の動きがつかみずらく、読みとりづらい。
R	〃	かん高い声反応がはやい	○	かん高い声、早いペースで、時には人を制してしゃべる。保育士が集団に問いかけると、いち早く大きな声で反応する。食事時間を長く(他の子どもたちより)要する。
S	〃	たよりになる	×	2年めの保育生活にすっかり慣れ、自分で考え行動している。保育士の手伝いができる。本人も頼まれることを期待されているふうでもあり、できたことで自信をつけている。
T	〃	心臓疾患おもらし注意	◎	心室中隔欠損のため手術を受けている。家庭では大声を張り上げ元気であると母親。おしっこのおもらしをひんぱんにする。こちらかの問いかけに対し、声での応答はなく、首を振ることで意思を伝える。
U	〃	生活習慣未習得	○	保育園生活2年目に入ったが、日常生活習慣において、できないことが多い。ことばによる指示が伝わりづらい。
V	〃	泣くことが多い	○	「おひるねがいやだ」「おひるごはんがいやだ」と、いやな時、又は、その状況が起こる前になると、泣き出す。立ちどまり、あるいはイスにすわり、指をくわえ周囲を見ていることが多い。
W	〃	泣くことが多い	○	進入園児が泣きわめいてる中において、目をまるくしておどろいているような表情で当初の1週間ほどをすごす。困ると指をくわえ泣き出す。
X	〃	泣くとめだつ	○	存在を忘れてしまうほど、ふだんはおとなしい。目立たない。生活習慣の指導が、新入園児の中では早い。困った状況になると一変して大声をはりあげて泣き出す。
Y	〃	おねしょをする	○	おねしょをする。食べないものが多い。気が強く、人を制して自分の意志を通すところがあると母親が語っていたが、それは感じられない。新しい環境にとどまっているように見える。

*・新入園児を示す。

表8 保育者からの目的接近 (佐々 1987)

パターン	特徴	具体的場面
I 径行型	保育者の必要度は高く動機はきわめて保育者中心的、A~T信号行動系までである。	初対面の子どもの前に行き、目の高さを同じくして「お名前は?」「何組さん?」と言う。すぐに頭をなでたり、抱き上げてほほずりをする。
II 視察型	職業人としての保育者の必要度。遠方操作 (A信号行動系)が多い。	日課の流れを知らせる。たとえば「ごはんですよ」「片付けて下さい」午睡時に、保育者が集団全体を見渡せる位置に坐る。
III 読みとり型	1. 健康観察	結果を予測し、子どもの保護の必要性の読みとり。 顔色が悪い。鼻水をたらしている。 落ちていたものを拾って口に入れようとしている。
	2. 危険予知	散歩中、左右を見ないで交差点を渡ろうとする。 ジャングルジムの上に登り、両手を離している。
	3. 要求察知	子ども自身の必要性に根ざす欲求の読みとり。 高いところにあるものを取ろうとしている。
	4. 行動補完	行動完成という視点からの必要性の読みとり。 排泄後、水を流さないままトイレを出る。 手に石けんをつけたまま、タオルでふこうとする。 食事の時間、野菜を残して食べ終わり、席を立つ。
	5. 行動継続	着脱時、パジャマ袋を持って立ち、動きが止まる。 おもらしをしたまま、その場に立っている。
	6. 行動修正	手を洗っている途中に、じゃ口に指を当てて水しぶきをとばしている。食事中、こぼれたお茶を手のひらでたたく。

保育集団の見方とかわりかた——個と集団が活かされる保育を求めて

都内公立保育園の保育者で保育5年目になる。4歳児15人を担任。補助の非常勤が一人いる。4年間は3歳未満児の保育に携わっており、複数担任の経験しかない。自分が責任をもってクラスの運営に当たらなくてはならないことになった。子どもたちは継続児が多いのになかなか大変なクラスであることがわかり、保育の運営について悩むということになった。4月2日に観察から得られた情報をもって相談に来た。一人ひとりの子どもが活かされて集団の良さが出てくる保育を運営してみたい、という切なる願いを持っていた。

1) 一人ひとりの把握のための試みとしての作表

一人ひとりが現在どのような発達の状態にあるのか、ということの評価してみることにした。観察した内容から作表をして、個をおさえ、集団のおおよその様相についての把握をしていくことにした。基本的な生活習慣が十分にできているのかどうか、遊びはどのようなものを得意とするのかなどについての作表を試みた(表9, 表10)。継続児が多いのに、4歳児の今でも基本的な生活習慣が自立していない子どもたちが多くことに疑問を抱き、以前の担当者、主任などに聞いてみたところ、5歳になったらやるようになるから、保育者は気にしなくていい、ということ言われたという。しかし納得がいかなかったという。保育生活では基本的な生活習慣の自立に向けて、保育者が援助していくことをふくめた保育内容にすることにした。外遊びが比較的少ない。園庭の狭さということだけではなく、3歳児の保育者は外遊びをあまりしていなかった、ということも関係しているらしいということもわかってきた。作表の結果を手がかりとしながら、子どもと子どもたち集団の形成過程を細かくみていくことにした。それぞれの子どもたちの発達の全般を評価するのに、標準的な発達の項目を羅列した資料から該当するところにチェックをしていき、できるだけその子どもの全体像が浮かびあがるようにした。どの子どもたちの育ちでも平均的になるものではない、ということがわかっていたものの、かなりのでこぼこが目だった内容になっていた。とりわけ多くの子どもたちに目立つのは「良く聞く」ということが弱いということであった。人間関係を接近過程の類型でみたところ、Bは遠方定置型、部屋にいないことが多いことがわかった。破壊的行動もする。危険がないように、ということが急務になった。そのほか、日本語がほとんどわかっていない中国籍の子どもI, 新入園児で発達に遅れがあるHがいる。15名とはいえ、集団運営のむずかしさが浮かぶ。集団としてみたときに少し小さめの子どもたちの集団としてかわることにした。

毎日、一人ひとりをきちんとみながら、丁寧にかかわることにした。個別の事例についてかわりについての悩みについては電話相談で応じたことと記録を持参してきたものを一緒に検討をした。6か月後の基本的な生活習慣(表11)と遊びの状態(表12)にまとめた。日々の保育の奮闘によってこの結果につながっていることだと思われる。

2) 年間計画の立て方

筆者とやりとりをしながら、担当者として、年間計画も含めてきちんとできるように考えることにした。初めてひとりで年間計画を立てた。表13。保育の目標が定まったことで日々の保育のすすめかたがわかったという。4歳児の時期に達成したい内容をまとめたことは、毎日、毎週、毎月、各期、及び年間の保育ねらいを考えることになったし、それらが毎日の保育をすすめていくこととつながっている。

表9 Y組の子どもたちの基本的な生活習慣の程度 (5月)

内容 子ども年齢	食 事	排 泄	睡 眠	着 脱	清 潔	手 洗 い	歯 磨 き
A 5:1	◎	◎	◎	◎	○	△ 手汚れても手洗わない	◎
B 5:0	○ 野菜苦手	◎	△ ふざける	△ 圓いボタン×遊び始める	○	○	◎
C 4:10	◎ 量は少ない	◎	○	◎	○	○	◎
D 4:9	◎	◎	◎	◎	○	○	○
E 4:9	◎ オシャベリに夢中になる	◎	△	△	○	○	◎
F 4:8	○	◎	◎	△	○	△	× やり忘れる
G 4:6	◎	◎	△	○	○	○	△
H 4:6	○	◎	× 午睡の習慣ない	△ パンツぬぐしまい忘れる	×	× 手汚れても手洗わない	○
I 4:5	△ あかずをえらぶ	◎	×	×	△	○	○ 遊びになる
J 4:5	○ はし苦手量少ない	○	◎	◎	○	△	○
K 4:4	◎	◎	◎ トントンしてもらいたがる	○	○	○	◎
L 4:3	◎	◎	◎	◎	○	○	○
M 4:2	○ Bとふざける	△ おもらし、オネショ	△	○	○	△	○
N 4:2	○ 野菜苦手	◎	○	△ やってもらいたがる	○	○	△
O 4:2	◎ はし苦手量少ない	◎	○	○	○	△	○

(1999.5 現在)

自分で全てできる ◎ ほとんどできる ○ 時々介助が必要 △ 全介助 ×

表10 Y組の子どもたちの遊びの内容とその程度 (5月)

子ども年齢	内容	電卓	レゴ	ブロック	お絵描き	粘土	折り紙	パズル	ままごと	はさみ	ジャングルシム	なわとび	砂場	鉄棒	ブランコ	すべり台	おにごっこ	どろんこ
A 5:1		X	X	X	◎	○	○	X	◎	○	○	○	◎	○	○	○	△	○
B 5:0		◎	◎	◎	○	○	△	○	△	○	◎	X	○	△	○	○	○	○
C 4:10		X	X	○	◎	◎	○	X	○	◎	○	○	◎	○	○	○	○	○
D 4:9		◎	○	◎	◎	△	◎	○	○	○	◎	△	◎	○	○	○	△	△
E 4:9		X	X	○	○	○	○	X	◎	○	◎	◎	○	○	○	○	○	◎
F 4:8		◎	○	◎	△	△	△	X	△	△	◎	△	◎	△	○	◎	△	◎
G 4:6		X	△	○	◎	○	◎	○	◎	◎	○	△	◎	◎	○	○	○	○
H 4:6		◎	○	◎	△	△	△	△	○	○	○	X	◎	△	○	○	○	○
I 4:5		◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	X	◎	△	○	○	○	○
J 4:5		◎	○	◎	○	○	X	X	△	○	◎	X	◎	○	○	○	○	○
K 4:4		X	X	△	○	○	○	△	◎	○	◎	△	◎	△	○	○	○	△
L 4:3		X	○	◎	◎	○	◎	△	◎	○	◎	△	◎	△	○	○	○	◎
M 4:2		◎	◎	◎	△	○	○	△	○	△	◎	X	◎	X	○	○	△	◎
N 4:2		○	X	○	◎	○	◎	△	○	◎	◎	△	◎	○	○	◎	◎	○
O 4:2		◎	○	◎	○	△	△	△	○	△	◎	△	◎	X	○	○	△	◎

(1999.5 現在)

たいへんよくできる ◎ よく好んでやる ○ 時々やる ○ ほとんどできない、しない △ しないかできない X

表11 Y組の子どもたちの遊びの内容とその程度 (9月)

遊びの内容 子ども年齢	電車	レゴ	デュプロ	お絵描き	粘土	折り紙	パズル	ままごと	ハサミ	ジャング ルジム	なわとび	砂場	鉄棒	ブランコ	すべり台	おにごっ こ	どろんこ	三輪車	特記事項
A 5:5	X	X	X	◎	○	◎	○	◎	◎	○	○	○	○	◎	○	△	○	△	空き箱でつくる。花をつんだり色あそびをする
B 5:4	○	◎	◎	○	○	△	○	△	○	◎	X	○	△	○	○	○	◎	○	まわりのことが気になり集中しない。暇いごっこ、おもちゃをふりまわす。
C 5:2	X	X	○	◎	◎	◎	X	○	◎	○	○	◎	○	○	○	○	○	◎	おり紙をよくする。ままごと、プール大好き。イヤと断われない
D 5:1	◎	○	○	◎	△	◎	○	○	○	◎	△	◎	○	○	○	△	◎	○	つみ木、びー玉コロコロ、絵本も好き、電車ごっこ、砂場でごちそうづくり
E 5:1	X	X	○	○	○	○	X	◎	○	◎	◎	○	○	○	○	○	◎	◎	ゲームをすることが好き
F 5:0	◎	○	◎	△	△	△	X	△	△	◎	△	◎	△	○	◎	△	○	△	電車が好き。一人遊びが多い、追いかけっこが好き、虫さがし上手
G 4:10	X	△	○	◎	○	◎	○	◎	◎	◎	△	◎	◎	○	○	○	◎	◎	ままごと 絵を描くのが好き
H 4:10	◎	○	◎	△	△	△	△	○	○	○	X	◎	△	○	○	○	◎	◎	紙ひこうきに興味あり、でんしやごっこ好き
I 4:9	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	X	◎	△	○	○	○	◎	◎	ビデオの世界に入り込む、紙芝居をつくる、Jと一緒に、ヒーローの世界に入りこむ
J 4:9	○	○	◎	○	○	X	X	△	○	◎	X	◎	△	○	○	○	◎	○	ポーとしていることもある、誘いを断らない、Fとおにごっこ
K 4:8	X	X	X	○	○	○	△	◎	○	◎	△	◎	△	○	○	○	◎	◎	Aの言いなりになるがポーとしている。ままごとと花つみが多い
L 4:7	○	○	◎	◎	○	◎	△	◎	○	◎	△	◎	△	○	○	○	◎	◎	ままごと大好き
M 4:6	○	○	◎	△	○	○	△	○	△	◎	X	◎	X	○	○	△	◎	◎	デュプロ好き、Bと一緒に描き出す砂、電車好き
N 4:6	○	X	○	◎	○	◎	△	○	◎	◎	△	△	△	◎	◎	◎	◎	◎	D、Iが好き
O 4:6	○	○	◎	△	△	X	X	○	△	○	○	◎	○	◎	◎	○	◎	◎	Hと遊ぶ、自分の言いなりに動かそうとする

(1999.5 現在)

たいへんよくできる ◎ よく好きでやる ○ 時々やる ○ ほとんどしない △ しない X

表12 Y組の子どもたちの基本的な生活習慣の程度と今後の目標（9月）

子ども年齢	遊びの内容	食事	排泄	睡眠	着脱	手洗い	歯磨き	支たく	食器片づけ	今後の目標、保育者の願い
A 5:5	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△	いいことのようにしているように見える。好きな遊びにじっくり取り組み、花などを大切にしている気持ちをもってほしい。
B 5:4	◎ 野菜苦手	◎	◎	△ ふざける	◎	◎	◎	◎	△	Y組の15人のひとりの人である自覚をもってもらいたい。相手の人の痛みなど気持ちよくくみとれる子どもになってほしい。
C 5:2	◎ 食欲がない	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	思いきって自分を出しきって生きていく生活してほしい。友人や保育士の目を気にすることなく
D 5:1	◎ やや苦手	△	△	◎	◎	◎	△	△	△	友達と一緒に遊ぶ楽しさも感ふざけが多い。
E 5:1	◎ 何でもよく食べる	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	強さはもっているものの、友達を優しくする気持ちをもってほしい。
F 5:0	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	赤ちゃんからの脱出、「ボクでできない」「イヤ」と押し通さないで自分でもやろうとする力を引きだしたい。
G 4:10	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	すぐにプイッとおこる。相手に命令ではなく対等に遊ぶようになってほしい。
H 4:10	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	ことばが増えること
I 4:9	◎ 身体が硬いが緩む	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	生活習慣の確立と言葉の獲得
J 4:9	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	思いきり自分を出してほしい
K 4:8	◎ 量は少ない	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	生き生きと“生活すること”“遊ぶこと”で楽しいというように
L 4:7	◎ よく食べる	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	友達の中でも自分を出せるように。生活リズムを整えて園生活を楽しくするように。
M 4:6	◎ ムラがある直ぐ歩く	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	オネショが心理的なものなのか。
N 4:6	◎ 野菜苦手	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	好きな友だちから遊びをより充分させてほしい。
O 4:6	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△	◎	友人関係の中で広がりを。

自分で全てできる ◎ ほとんどできる ○ 時々介助が必要 △ 全介助 ×

表13 平成11年度 年間指導計画 4歳児 Yぐみ

<p>園 目 標</p>	<p>心もからだも健康な子ども 思いやりのある子ども 意欲をもってとりくむ子ども <人の気持ちを考えられる優しい子ども></p>
<p>ク ラ ス 目 標</p>	<p>▶自分の気持ちや思いを素直に表現してゆく。 (○保育者に安心して、自分の気持ちや感じたことを表現できるような関係を作っていく。 ○友達との関わりの中で、自分の考えや思いを出せるようにする。</p> <p>▶生活に必要なことが、自分で気づいて動けるようになる。 (○生活していく中で、今何をするときなのか自分で考えて行動できるようにしていく。また保育者といっしょにやっていく中で、考えたり気づいて行けるようにしていく。</p> <p>▶身体を十分に動かして、楽しんで遊ぶ。 (○身体を動かすことが楽しいな、気持ちいいなと思えるようなきっかけを作っていく。また自発的な気持ちを大切にしながら必要な部分で援助していく。</p> <p>▶さまざまな経験や体験を通して感じる心や思いやりの心をもつ生活に必要なことが、自分で気づいて動けるようになる。 (○友だちや保育者と関わるのが楽しいな、ステキだと思えるように一緒に生活していく。 ○一人ひとりの言葉や気持ちを保育者がしっかり受けとめてゆくことをつみ重ねていく中で、相手の気持ちを大切にすることを伝えていく。</p>

No.2

期 内容	1期 (4、5、6月)	2期 (7、8月)	3期 (9、10、11、12月)	4期 (1、2、3月)
期の ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○一人ひとりが好きな遊びをじっくりと する。 ○基本的な生活習慣がしっかりと身につく。 ○保育者との信頼関係をつくっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○身体を十分に動かし夏の遊びを楽しむ。 ○自分の気持ちを、言葉で素直にあらわす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○友達とかかわって遊ぶことを楽しみながら、かかわりを深める。 ○行事の意味を知り楽しんで参加する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○友達の気持ちを考えてかかわりながら、協力しあっていく。 ○進級への期待をもつ。
配 慮	<ul style="list-style-type: none"> ○一人ひとりが好きな遊びができるような環境を工夫して提供する。 ○食事、排泄、睡眠、着脱、清潔がしっかりと身につくよう一人ひとり見ていく。 ○一人ひとりと丁寧にかかわり、気持ちをうけとめていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○泥んこや、水あそびを十分に楽しむ身体を動かしていく。 ○友達とかかわって遊ぶ楽しさを実感しながら、自分を素直に表現できるようにしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○友達同志のぶつかり合いでは相手の気持ちを聞き入れたり、自分も出したりしながら、自分たちで解決できるような援助をしていく。(自分自身が考えるようにしていく。) 	<ul style="list-style-type: none"> ○友だちがいることが“いいな”“かかわることが楽しいな”と思えるような経験ができるようにしていく。 ○年長児へのあこがれをふくらませ自信を持って行動できるようにしていく。
生 活	<ul style="list-style-type: none"> ○身のまわりのことなどができることは自分でできるようにする。 ○Y組みでの生活の仕方を知り過ごす。 ○マナーを知って楽しく食事をする。(食事中は立ち歩かない。箸であそばない) → ○嫌なものでも食べてみる。交互に食べる。 ○自分で最後まで食べようとする。 ○入睡までの流れを促される。(食器の片付け、菌みがき、着替え、排泄等) ○促されて衣服や身体汚れに気付く、自分で着替えたりきれいにする。自分で気づいたら → ○促されたり、気づいて衣服の調節をする。 ○菌みがき、うがい、手洗いなどの習慣が身につく。 ○排便の後始末を自分でする。 ○布団に入ったら静かに眠ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○友だちと一緒に生活の仕方が分かって協力し合っている → ○自分のもの、友だちのもの、共同のもの、区別に気付く、分かって大切にしようとしていく、ゆづり合う気持ちを持つ。 ○夏の健康、生活の仕方を知り過ごす。 ○食事中は立ち歩かない。箸であそばない) → 	<ul style="list-style-type: none"> ○友だちと一緒に生活の仕方が分かって過ごす → ○自分のもの、友だちのもの、区別に気付く、分かって大切にしようとしていく。 ○食事のマナーが身についていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○友だちと一緒に生活の仕方が分かって過ごす → ○冬の健康、冬生活の仕方を知り過ごす。 ○最後まで自分で食べられるようになる。 ○入睡までの流れを見通しをもってする → ○自分で着替えたりきれいにする。自分で気づいたら → ○菌みがき、うがい、手洗いなどの習慣が身につく → ○排便の後始末を自分でする → ○布団に入ったら静かに眠ろうとする →

<p>使ったものは片づけようとする。 ○皆で使ったのも自分たちで片付けようとする。 ○交通ルールをなげ守らなければならぬかを守ろうとする。 ○危険なこと、もの、場所、あそびを知り、約束を守ろうとしたり、気をつけてあそぶ。 ○保育士に対し安心感を持ち自分を出す ○保育士や友だちとおしゃべりをたくさんし、思ったことや要求が言えるようになっていく。 ○友だちとあそんだり生活する中でのルールや約束などを知り守ろうとする。 ○ごっこあそびや集団あそびなど友だちとのあそびを楽しむ。 ○保育士や友だちのおしゃべりを楽しむ ○見たり聞いたり経験したことをなどを話したり、疑問に思ったことをたずねる。 ○友だちと一緒に保育士や身近な人の話を親しみをもち聞いて聞く。 ○人の話をよく聞く。 ○おしゃべりや話を聞いたり、絵本、紙芝居、ことばあそびなど日常生活や遊びの中からことばのおもしろさや美しさを感じ、いろいろなことばに興味、関心を持つ。 ○感じたこと、思ったこと、経験したこと、想像したことを様々な素材や用具を使って自由に作ったり描いたりすることを楽しむ ○泥んこ水あそびなどを思いっきり楽しむ。 ○身近な自然などにふれ、おもしろさ、不思議さなどを感じ、興味、関心を持つ ○身近な動植物に親しみ、世話をしたり、愛情や関心を持つ ○日常生活の遊びを通して、大きさ、色、形、量、曜日、文字などに興味、関心を持つ ○友だちと一緒に歌ったり、音楽に合わせて自由にからだを動かしたり表現することを楽しむ。 ○絵本、紙芝居などを楽しむ。 ○自身をたくさん動かし、思いっきり遊ぶ ○散歩を楽しむ ○いろいろな行事に喜んで参加する。</p>	<p>おもてなしの大切にすることや片付けの必要さが分かり片付ける。 ○危険なことが分かり安全に行動しようとしていたり、危険に対して自ら気づき避けたり知らせる。 ○自分の考えを出しながら、相手の話も聞こう としてたり分かってもらう。 ○相手の気持ちも分かり自分の気持ちもコントロールしようとする。</p>	<p>遠足 運動会 焼き芋 お店やさんごっこ</p>	<p>クリスマス会 秋期健康診断 会食</p>	<p>お楽しみ会 ひなまつり 卒園式</p>	<p>お別れ会食 保護者会</p>
<p>あそび</p>					
		<p>(遠足 運動会 焼き芋 お店やさんごっこ)</p>	<p>クリスマス会 秋期健康診断 会食</p>	<p>お楽しみ会 ひなまつり 卒園式</p>	<p>お別れ会食 保護者会</p>
		<p>(園科検診 会食、個人面談)</p>			
		<p>(入園・進級を祝う会、春季健康診断 会食、保護者会)</p>			

今後の課題

ここで紹介した事例は発達の筋道を順調には育ってはいない子どもたちの現状からの打開策としての方法論であった。記録を元にしながら個別の事例を検討をする、ということではしなかった。個をとらえながら保育集団全体をふまえていくことに焦点を当てた試みである。個別の事例の検討もふまえながら、保育集団を丁寧に見ていく、ということを保育実践者たちとの研究会で検討をしていきたい。保育者としてどのようなことについて迷い、悩んでいるのか、ということについて、多くの保育者たちとの相談活動をどうして、共通性と個別性について検討をしていきたい。その上で、かかわりかたの方法論がわかるような、できるだけ簡便に発達の評価ができる資料のつくりかたについての検討を加えたい。どの保育園も11時間開所になって9か月がたつ。産休明け保育、延長保育、一時預かり保育が時代の要請によって増えてきている一方で常勤職員としての保育士が少なくなっている。クラス運営に携わる保育者も8時間労働のなかで勤務のローテーションをこなしながらすすめている。保育はかかってないくらいにさまざまなことが要求されるようになってきている。短時間保育に携わる人や時間が短いパート労働の人とのあいだで、この保育園のめざす保育をともに考えながらすすめていくには保育の理念と連携のありかたが問われてこよう。個別の子どもや親の問題についての解決策は、発達・臨床活動から得られた経験からまとめることができるが、筆者のような専門職の前にかかわる保育者たちが相談にのれる事柄とはどのようなものなのか、相談はどのようにすすめていくのか、ということについて、保育者たちの相談内容から検討を加えてまとめていきたいと思っている。

引用文献

1. 上條里子、佐々加代子 (1988) 保育におけるコミュニケーション関係の展開— 保育集団のなりたちから—、日本保育学会第40回大会発表論文集、88—89。
2. 佐々加代子、堤由起子 (1985) 保育におけるコミュニケーション関係の成立Ⅰ、Ⅱ、日本保育学会第38回大会発表論文集、488—491。
3. 佐々加代子 (1985) 乳幼児の言語発達における臨床的研究Ⅲ 言語発達における母子関係の発達段階と信号系の検討、白梅学園短期大学紀要第21号、29—45。
4. 佐々加代子、梅田裕子、堤由起子 (1986) 保育におけるコミュニケーション関係の成立Ⅲ、Ⅳ、日本保育学会第39回大会発表論文集、440—443。
5. 佐々加代子、堤由起子、梅田裕子他 (1987) 保育におけるコミュニケーション関係の成立Ⅴ—1～2、日本保育学会第40回大会発表論文集、106—109。
6. 佐々加代子 (1996) 言語習得と人間関係、犀書房。
7. 佐々加代子、松本理絵子、関根友紀子他 (1998) 3歳未満児の保育、日本保育学会第51回大会発表論文集、244—247。
8. 佐々加代子、八木理沙 (1999) 3歳未満児の保育、子どもとのかかわりかた、日本保育学会第52回大会発表論文集、
9. 佐々加代子 (1999) 発想・想像・表現、犀書房。
10. 堤由起子、梅田裕子、佐々加代子 (1988) 保育におけるコミュニケーション関係の成立Ⅵ、Ⅶ、日本保育学会第41回大会発表論文集、90—93。
11. 梅田裕子、中村晃子、佐々加代子 (1989) 0歳児保育における人間関係の展開、日本保育学会第42回大会発表論文集、586—587。
12. 梅田裕子、堤由起子 (1989) 保育における人間関係の成立と展開—0歳児保育からの検討、第20回保育研究大会発表資料、東京都公立保育園研究会、177—192。

参考文献

1. 佐々加代子 (1997) 子どもからの贈りもの、犀書房。
2. 佐々加代子 (1998) コミュニケーション能力弱者のQOL援助、犀書房。